

◆対談

社寺建築の設計を振り返って

藤本春樹 × 延原隆司

- 日 時：2025年1月24日
- 場 所：(一財)建築研究協会理事室
- 出席者：藤本春樹（元職員）、延原隆司（参事：主幹研究員）
銚井修一（理事長）、今村祐嗣（常務理事）、疋田 寛（事務長）

-
- 藤本春樹：1975年に当協会に入職し、2015年に定年退職、その後2020年まで嘱託、2024年まで技術顧問。49年の長きにわたり、新築の社寺建築の設計監理に従事。今まで携わった建築物には、仏母寺伽藍新築（千葉県、1977年）、布忍神社御社殿造営（大阪府、1983年）、辛國神社御社殿造営（大阪府、1987年）、阿含宗総本山総本殿建立（京都府、1990年）、東林寺客殿・庫裡新築（島根県、1999年）、相国寺東京別院方丈・客殿建立（東京都、2013年）、成田山新勝寺醫王殿建立（千葉県、2018年）、茨木神社本殿造替（大阪府、2022年）、華嚴寺（鈴虫寺）客殿・寺務所新築（京都府、2023年）、大阪成田山不動尊山門新築（大阪府、2024年）等がある。
 - 延原隆司：1982年に当協会に入職し、主に伝統建築物の設計監理に携わってきた。現在、参事・主幹研究員。設計監理した建築物には、高野山寺本堂新築（北海道、1986年）、宝満寺本堂新築（岡山県、1988年）、西見寺本堂新築（静岡県、1988年）、成田山新勝寺聖徳太子堂新築（千葉県、1989年）、名勝養浩館（旧御泉水屋敷）復元（福井県、1989年）、鹿嶋神社祈禱殿新築（兵庫県、1992年）、金峰山寺本地堂新築（奈良県、1996年）、潮音寺本堂新築（兵庫県、1996年）別府住吉神社社殿新築（兵庫県、2000年）、寂光院本堂再建（京都府、2001年）、慈照寺（銀閣寺）研修道場新築（京都府、2010年）、西廣寺納骨堂新築（兵庫県、2017年）等がある。
-



写真1 対談風景
(正面左：延原氏、正面右：藤本氏)

今村 令和7年1月8日に当協会は創立70周年を迎えましたが、本日の対談では職員として長く協会に関わって来られた藤本さんと、現在も勤務されている延原さんのお二人に昔を振り返って頂き、当時の建築研究協会の状況やお二人が携わられた仕事の内容などをお話して頂きたいと思って企画しました。どうぞ気楽に、ざっくばらんにお話し頂いたら結構かと思います。それでは、まず、藤本さん、次に延原さんから協会に入られたきっかけなどをお話願えますか。

藤本 私は、昭和50年(1975)に協会に入りました。今からちょうど50年前になります。卒業した学校の校長先生が京大建築学教室の教授をされていた当協会とも関係の深い村田先生*1でしたので、一般の建築設計事務所の仕事とは異なる伝統建築、特に茶室などの設計をやりたいと思って相談したところ協会を紹介して頂き、こちらにお世話になるようになった次第です。

延原 私は藤本さんより遅れて昭和57年(1981)に協会に入りました。担当教授に設計がしたいと伝えると、先輩が3人いる協会があると言われ、それならお願いしますって決まったような経緯です。卒業前の12月に協会に来たときには現在の事務所の西側部分を増築中でしたが、翌年4月の初出勤の時にはもう出来上がっていました。

今村 現在の協会の建物はここ、鴨川と高野川が合流する出町柳から川端通を少し南に下がった左京区田中関田町にあります。その前の状況などはご存知でしょうか。

藤本 私が聞いている範囲で言いますと、最初は京大の建築学教室の中でしたが、学園紛争などもあって修学院の山端に移りました。しかし、そこは普通の住宅みたいな建物で手狭ということもあり、今の協会の近くの財団法人発明センターに部屋を借りて再度移りました。その後、1971年に現在の事務所建物の東側部分が新築されました。私が協会に入った時は修学院の建物もまだ倉庫みたいにして使っていました。

今村 協会で働いている方は当時何人くらいだったのでしょうか。

延原 私が勤め始めた頃は事務部門も入れて常勤の職員は18名でした。

藤本 その頃は鳥取にも分室がありまして、お一人が勤務されていました。その前は岡山にも分室があったようですが、

私が入ったときにはもう鳥取だけでした。

延原 鳥取、岡山など中国地方で公共施設の建設が盛んな時代だったようですが、その地方に市役所や体育館などの大型物件を手掛けられる大手の設計事務所が当時はまだなく、京大の建築学教室の先生方と協力して設計に当たったと聞いた覚えがあります。工事監理業務などのために事務所を置いて常駐されていたということです。

藤本 岡山にも分室があったと言いましたが、その関係もあって、当時は四国の坂出工業高校などの出身者が何人かおられました。

延原 かつては、大阪万博の日本庭園の基本計画、京都タワー、明石の天文学館など大きな仕事を京大の先生の指導のもと協会が行っていました。しかし、そうこうしているうちに大手の設計事務所も増えてきて、そういった一般建築の設計業務が段々と少なくなってきたようです。

藤本 そのような状況の中で1965年に大森先生*²が協会に来られ、本格的な日本建築の仕事が始まったと聞いています。私が入ったときにはスタッフの多くは大森先生の率いる日本建築研究室第3部に属していました。第3部と呼んでいましたが、1部2部はどうもなかったらしいです(笑)。

大森先生から伺った話ですが、村田先生はいわば昭和の文化財建築をつくるん

だという意気込みをお持ちで、将来、昭和の時代の文化財として残るようなものを協会として目指しておられたようです。

■ 社寺建築の様式 ■

今村 ところで、藤本さんが最初に携わられた仕事というところになりますか。

藤本 曼殊院の表門の修理設計で、実測して現況図を描けと言われたのが最初の仕事でした。学生時分に少し町屋の調査などをした経験はあるのですが、そういった本格的な社寺建築については実測の経験もまったく無く、すべて初めてのことでした。

当時の大手の設計事務所では、展開図や伏図など補助的な仕事を何年かやらせて新人を育てていくことが多かったようですが、協会ではお施主さんとの打ち合わせから図面作成、工事費の見積りや工事現場の監理まで、設計監理業務の一から十まで自分ひとりで出来るように人を育てるとというのが方針でした。

最初の仕事として曼殊院表門の実測をし、それを図面化するのはいわば訓練だったようです。現場へ行くと、おまえ上で測れと言われて私が足場に上って採寸し、先輩が下で野帳に書いていくのですが、下の方から大斗の斗尻巾はなんぼやとか言われても、最初のうちは部材名称もまだ分からずにもたもたしている状況です。そのうち慣れてくると下の方で書いているペースも頭に入ってきて、大斗のここ

はなんぼです、これはいくらですって言いながら先を読んで進めると、下の方はベテランですので上で何を測っているのかが分かりますので作業も捗るようになりました。

現場に入っておられた協力業者さんにも、手伝ってもらったり教えて頂くこともたくさんありました。

今村 藤本さんは最初に修理の仕事をされたということですが、新築設計の方はどうですか。

藤本 私が協会に入った頃は東本願寺の大谷本廟にある庫裡・茶所とかの大きな仕事が動いていました。そのため、ほぼ全員がその設計に取り組んでいる状態で、その一員として展開図などを夜遅くまで一緒に引いていました。

今村 延原さんは最初に手掛けられ仕事というとは何でしょうか。

延原 奈良の大字陀にあるお寺の客殿の設計をさせてもらったのですが、残念ながらその仕事は途中から他の建設会社に移ってしまって手を離れました。そんな事情もあって最初の仕事はよく覚えていないんです。その後やったのは東山区の今熊野の女子大生専用マンションじゃなかったでしょうか。当時はわずかですが一般建築もやっていました。

今村 それで、お二人がいわゆる社寺関係の新築設計を本格的に始められたというところでしょうか。

藤本 私の場合すべて任されてやり遂



写真2 仏母寺客殿・庫裏・茶所
(木造、1997年)

げた初めての仕事は、千本釈迦堂（大報恩寺）の国宝監視所です。拝観受付のための小規模な建物ですが、防災センターを兼ねた鉄骨造の建物で現在も残っています。その次に、千葉県のお寺の仏母寺というお寺の客殿、茶室、庫裏を木造で設計しました。この建物は手掛けたかった茶室を含む数奇屋風の複合的な建築で、天気の良い日には客殿床の間の丸窓越しに富士山が見えるのですよ。こんな趣向を凝らした間取りの設計をやらせてもらいました。この仏母寺は私が最初に取り組んだ木造建築で、あれこれ考えて平面計画から細部のディテールまでを自分で決めて大森先生にチェックを受けながら何度も修正を繰り返し、最終的にお施主さんのもとに持っていくという感じでした。

延原 私が最初に取り組んだのは北海道の大樹町（広尾郡）にある高野山寺、当時は高野寺と言っていたのですが、その本堂です。不思議なご縁で、一昨年の秋頃に、当時のご住職のお孫さんが協会に尋ねて来られまして色々お話をしま



写真3 高野山寺本堂（S造、1986年）

した。その中で、私が本堂も建てて40年になるので一度点検した方がいいよと、お父さん（現住職）に伝えといてと話をしたんです。そうしたら後日、現住職から本堂を一度見に来て欲しいと連絡がきました。それで昨年の秋に行ってきたのですが、往時を思い出して感慨深いものがありました。

今村 その頃というと、協会としては社寺の新築設計が主な仕事だったんでしょうか。

延原 協会としては基本が新築の設計で、総体的に文化財建築の修理自体は少なかったです。

藤本 ただ、私が入った時には、東大寺の大仏殿の修理工事（昭和の大修理）が行われていて、この現場では協会の理事だった京大の金彦先生^{*3}の指導でスライド式の素屋根が導入されていました。その工事については協会に入る前から興味があり知っていましたが、この素屋根の設計を協会が手掛けられたということは入所後に伺いました。素屋根を修理建

物の横で組み建てスライドさせて建物を覆うという方式は、多分、大仏殿が最初の試みだったと思います。今はもう文化財建築の修理の世界では当たり前のようになっています。

延原 平城宮の大極殿の復元工事の素屋根も、西本願寺の御影堂や現在工事中の延暦寺根本中堂の修理もスライド方式で素屋根を懸けて工事が行われています。

今村 以前に延原さんから、一時、鉄筋コンクリート造（RC造）でお寺の本堂を建てるのが流行った時代があったと伺ったことがあるのですが、その頃だったのでしょうか。

藤本 四天王寺伽藍の復元がそのきっかけではなかったでしょうか。やはり木造は火に弱く、コンクリート造なら頑丈で火にも強いという神話的なものがあって、規模の小さい神社の本殿までRC造でつくるというのもありました。協会の初めての鉄筋コンクリート造の仏堂建築は1973年に着工し1975年に竣工した智積院の金堂で、プロポーシオンを含めて本



写真4 智積院金堂（RC造、1975年）

格的な様式の日本建築でした。私自身も京都府久御山町の華台寺のほか2、3の本堂をRC造で設計しました。また、鉄骨鉄筋コンクリート造（SRC造）になりますが、協会の設計で最も代表的な建物は成田山新勝寺の大塔ではないでしょうか。まあ、この塔は規模が大きく、木造では無理という事情もありましたが。

延原 ただ、RC造は結露や塗装の塗り替えといった課題のほか、改築の時に壁を構造上取り除いたりすることが出来ないで丈夫だけど不便という問題があります。

藤本さんとかはお寺の本堂をRC造でつくっておられるのですが、私の時代はもう鉄骨造に変わってきていました。

藤本 RC造の方もだんだん柱や桁、長押、破風板や化粧垂木などの軒廻りの部材をプレコン（プレキャストコンクリート）でつくり、躯体に取付ける工法が開発されて、南禅寺の収蔵庫や仁和寺の御室会館とかに使われました。その頃にプレコンメーカーさんとの共同研究で木調



写真5 阿含宗総本山総本殿（SRC造、1990年）

風の擬木が開発されたのですが、これは協会がやり始めたのです。凸凹のある木目の形を写した型枠でコンクリートを成型し、焦げ茶に塗装して仕上げます。長押とか柱とかはプレコンにすると、現場塗装で仕上げるより耐候性が良く長もちすると言われていました。

延原 木の肌合いの型を先に作っておいてコンクリートを打って固め、それを現場へ持ってきて金具で留めていくわけです。

藤本 大森先生もよく仰っておられましたが、RC造とか鉄骨造で建てたものは出来たときが一番きれいで、あとは劣化していくばかりだけれど、木造にはその時々良さみたいなのがあって、木造の弱点である火災にさえ気をつけていれば良いということです。そんなこともあって木造が見直されるようになってきました。

延原 木造へ回帰し始めたのですよ。先ほども出ていましたが、コンクリート造の場合は何十年経つとペンキを塗り直さないといけません。ペンキの塗り替えは足場を組んでやるわけで、結構お金もかかると分かってきたのです。それだったら、最初は少し高いけれど木造で、ということになったのだと思います。

藤本 鉄骨造でも木を貼って木造風に見せるというのもありました。当時はこの方法も結構流行っていました。

今村 今も貼った木は大丈夫なので

しょうか。

延原 それは大丈夫なんです。

■ 社寺建築と木材 ■

今村 ところで、木造の社寺建築というところ、基本的に檜でやるイメージがあるのですが、当時はどうだったのでしょうか。

延原 その頃は台湾檜（台檜）がよく使われていました。国産の檜に比べて値段が安く、それに、大径の木が入って来ていましたので、破風板とか大きなサイズの部材でも1枚で取ることが可能でした。

大正時代に建てられた京都御所の建物もそうですが、台檜は大正、昭和の初期くらいから盛んに使われています。その頃は台湾が日本の植民地だったという事情もあるのでしょうか。

藤本 当時に台檜で建てた建築を今見に行っても、ほんとうに国産の檜より良い木のように思います。もっとも協会の検品は厳しいとよく言われていましたが。

阿含宗総本殿の仕事が始まった1988年頃には、同時期に首里城の平成の復元工事もあって、もう台檜の良材が減ってきていました。台湾政府が伐採を禁止し始めたという事情もあったのでしょうか。

延原 私が本堂の設計を一人で担当するようになった頃には、台檜からカナダ檜に変わりつつありました。ある本堂の材料検査でカナダのバンクーバー島にカナダ檜の森を見に行っただけですが、雨が

よく降って木の成長が早いのです。これを日本に持ってきたら環境の違いから縮んだり割れたりしますので、その時はやっぱり日本の檜を使うのが一番いいと思いましたね。このカナダ檜ですが、イエローシダーあるいは米ヒバとも呼ばれています。

藤本 カナダ檜は学術的な分類では檜の仲間ですが、粘りっ気がない感じで、裂けるように割れが入ります。米ヒバとも呼ばれているのはわが国にあるヒバと色や香りが似ているところからだと思います。日本のヒバはアスナロ属に分類されていますが、割れが入りやすいという点でも両者は良く似ています。

国内産の青森ヒバで本堂を建てていた時ですが、現場にいたらびっくりしましたからね。バッシンって、本当に建物が壊れるんじゃないかと思うほど音がしました。でも、確かに青森ヒバはねじれますが、腐りにくく虫もつきにくく、水にも強いです。

延原 今、工事をしているお寺のご住職からも、できたら青森ヒバで建てて欲しいと言われたのですが、コストも含め諸条件が合わなくて檜になりました。

藤本 それに、量が出ないので、材料としてなかなか揃わないという事情もあります。

今村 そうすると、お二人がずっとやってこられて、寺社の建築ではやっぱり檜が一番という感じですか。



写真6 鹿嶋神社祈禱殿（木造、1992年）

藤本 建築には一番向いているかなと思います。樫とかも扱いましたが、ねじれとか、くせを取るのが大変でした。柱など大きな寸法のものはまだいいのですが、垂木など細くて長いものになってくると苦労しました。その点、桧は暴れないですね。

今村 でも、国産の桧もだんだん良いものが少なくなってきているでしょう。

藤本 今はほとんどが植林木になってきていて、天然林の木曾桧も出なくなりました。

延原 面白いもので、吉野桧に比べて尾州桧はどちらかというと軟らかい感じ



写真7 養浩館（木造、1989年）

がします。だから建具の障子とかは尾州桧を使うほうが木目も細かくて暴れなくていいですね。

藤本 吉野桧の色はピンクと白が混ざったような感じで、一方の尾州桧は割と均一なピンク色をしています。

■ 図面を描く ■

今村 それで、当時、お二人が設計されていたとき、CADはもちろんパソコンもなかったと思いますが、図面はどのように描かれていましたか。

藤本 すべて鉛筆で手書きです。その頃から使われ始めていた製図用のシャープペンシルも使って、0.3mmの芯を紙上で研ぎながら描いていました。

延原 製図用紙は本当の和紙ではないのですが、紙の裏側を加工して裏打ちしたケミカル和紙というのを使っていました。結構薄いですが丈夫で、鉛筆で書く表側は和紙っぽい肌ざわりです。サイズはロールもありましたが、A1とかA2サイズで協会の用紙枠が印刷されたものもありました。それを青焼きで複写していました。

藤本 われわれが描く線というのはとても細いですからケミカル和紙が向いているのです。長い線を引く場合、一定の太さの線になるように鉛筆も回しながら引いていました。トレーシングペーパーではすぐ鉛筆の芯が丸くなって繊細な線が引けないのです。

延原 鉛筆というと、私はHBを使っていました。

藤本 2H、4Hとかもありましたが、Hぐらいまではどうしても薄かったりする上、あまり強く引くと紙が引っかかって穴が空くなんてことがありました(笑)。

延原 だから、職人技的なんです。長い線を一気に引けないときは途中で一遍すつと上げると薄くなりますね。今度は、この線に重なるようにそうっと鉛筆を置き始めてずーっと力を入れていくと、端から端まで同じ一本の線に見えるようになりますかね。そういう技術を駆使して頑張っていました。

藤本 製図板も、私らのときはまだ無垢板のものを使っていました。

延原 その上に白い紙を貼って和紙を重ねて描いていました。その後、合板のものが使われ出しましたが。

藤本 最初、私はT定規を使っていました。アーム式のドラフターとか、トラッカーと呼ばれていたレール式の製図機が普及するようになってからは、私はトラッカーを愛用するようになりました。

延原 私は最初から平行定規しか使っていないです。

藤本 軒廻りや破風板などの曲線部分は定規で書くのですが、臺股や彫刻などの文様は全てフリーハンドで描いていました。

延原 今も、彫刻などの渦の絵とかはフリーハンドで描いています。結構大変

ですが、手に覚えこませているという感じですよ。

藤本 工作中、長く手が止まったまま製図板に向かって考え込んでいると、席の後ろから先輩に何を悩んでいるんやと声を掛けられて、ちょちょこっと、こうやるんやと教えてもらうことが度々ありました。今は皆さんデスクでパソコンに向かって仕事しておられて状況が周りから見えないので、ちょっとしたアドバイスや指摘が出来にくく、仕事を覚えていく過程では非常に気の毒な環境のような気はします。

延原 製図板に向かっていている場合は、横から人の描いている図面も見ることが出来て勉強になることもありました(笑)。

もちろん現寸で描くのは彫刻の部分だけで、建物本体は縮小した図面です。大工さんがわれわれが描いた図面を、細かい書き入れ寸法を参考にして現寸大に描かれるのですが、大工さん任せにせず細部は修正しないといけないんです。この現寸図の検査で軒の反りなどの曲線を最終確認して決定します。それ以降は大工さんの領域になりますので、現寸検査で一言「OK」と言うまで図面の微調整に妥協はしたくないですね。

今村 図面を描かれるときは、尺、センチのどちらをお使いになっていますか。もうお二人とも尺とかは使いませんか。

延原 最初の頃はセンチで考えて尺に置き換えていたのですが、そのうち尺で

考えてセンチに置き換えるようになりました。

藤本 建物の大まかな構想を練る時などは尺でイメージします。何間の構えにするかとか。そして、一間を6尺5寸にするか、あるいは6尺3寸にするか、そういうオーダーで考えます。ですから、一間を6尺5寸にするなら197センチ、6尺3寸なら191センチにします。

今村 大工さんに渡す図面は、今はセンチで入れているのですか。

延原 それは大工さんによりますね。大工さんによっては尺で設計して欲しいと言われる方もいます。ただ、確認申請の書類はメートル法で表記する必要があり、両方書いているときもあります。

藤本 基礎とか鉄筋工事の図面はセンチにしたりしますので、換算誤差の端数がどうしても出てきます。特にCADで描くとそれがはっきり出てくるので気持ちが悪いですね。手描きの場合だと、ちょっとした変更であれば書入れ寸法の訂正だけで済んでいたのですが、CADでそれをすると間違いの元になり、後々大変なことになってしまいます。

今村 瓦はどっちでいってますか、今は。

延原 今は瓦の形はJIS規格によっていますのでセンチなんです。

藤本 棧瓦はね。ただ、本瓦を割りつける際は、9寸3分で割ろうとか尺で考えています。

延原 本瓦の場合、9寸瓦とか9寸5

分瓦とか言っています。270ミリ瓦とは言いません。

文化財の修理など昔の建物は尺で考察しないといけないです。古い明治建築なんかではインチで測ります。インチスケールがないと元の雰囲気分からないですよ。ですので協会には当時インチ、フィートの巻き尺もありました。アメリカ人が設計した建物、例えばライトの設計した建物もそうですね。

今村 センチ、ミリに置き換えると端数が出るでしょう。

延原 端数が出るから丸めないといけないのですよ。で、その丸めるのを約束事として図面の中で統一しておかないと不具合が生じます。どこかで吸収しないとけません。

■ 建築の意匠 ■

今村 新築設計を始めようするとき、屋根の形や勾配、あるいは建物の大まかな形状はどういった発想で決められるのでしょうか。

藤本 初めの頃は先輩方の描かれた図面を参考にしました。協会には今までの図面が沢山ありますので、皆さんが帰られた後などに参考になる原図を引っ張り出してきて、自分なりに理解して真似るように描いていました。

不思議なもので協会流の形というのがあって、ほかの設計事務所の方から見たら、あ、協会さんの図面やとすぐに分かつ

たものです。

延原 文化財建造物の修理とかをされると、現場で破風板や茅負などの曲線を実測して図面の作成の為に型板を作られるのですが、そういった型板が協会にあります。どこの国宝・重文の建物の型板かは分かりませんが、沢山ありますのでそれらを使用しています。人気のある型板は使いすぎて、擦り減ってきているものもあります。



写真8 型板

今村 そうですか。だから協会風のイメージがあるのですね。協会が関与した建物は外見で何となく分かるものですか。

藤本 やっぱり分かりますね。でも、細部は人によっても特徴があり、大森流、西田流（西田義雄氏、当協会元職員・理事・顧問、代表作は宮崎県の百済の里博物館（西の正倉院）、大沼流（大沼芳則氏、当協会元職員・理事、代表作は龍安寺仏殿）など、違いますね。

今村 歴史的な建築物の時代でいうとどうですか。

延原 大森先生は平安後期のものも取り入れておりましたが、事務所としては中世、ほぼ鎌倉から室町の初めにかけてですね

藤本 鎌倉時代に木造建築は完成されたってよく聞かされました。



写真9 別府住吉神社 (2000年)

延原 初めは何がいいのか全く分からなかったのですが、皆で見学旅行に行った時や実測調査の時などに、これがいいね、この形が良いねとか言われると、だんだんと頭に入ってきました。

藤本 奈良時代の建物は、協会さんは得意やないからとも言われました。

延原 奈良時代の建築になると、後の時代とは少しデザインが違うのですよ。線の使い方が違いますね。

藤本 言ってみたら軒が無理をしている、構造的に無理があるという感じがあるのです。

鎌倉や室町になると意匠と構造がちょうどうまく一緒になって、いわば一番パランスの取れた木造としての理想の形が

完成したのではないかと思います。

■ 人とのつながり ■

今村 藤本さん、延原さんが今まで手がけられた色々な建物で、自分で一番気持ちもちがこもっているとか、印象が深いというのはどうでしょうか。

藤本 阿含宗の大規模な建物を鉄骨鉄筋コンクリート造で設計させてもらった経験も貴重ですが、規模は小さくても、宮司さん、氏子さんたちの熱意が溢れ、施主、設計者、施工者が一丸となって取り組み、皆で完成に漕ぎつけた社殿造営も感動的でした。また、成田山新勝寺の醫王殿のように最高の材料で、思うように設計させてもらったのも達成感があり、うれしい仕事でした。

延原 私の場合は、やはり最初にやった高野山寺が今でも思い出が深いですね。住職さんとのつき合いも含めて。

今村 お施主さんとの人間的な付き合いという面もあるんですね。

藤本 知り合いの工務店から、ある神社で社殿の建て替えを計画されているという情報を聞いて、年末の大掃除が終わった後に大森先生と大阪の松原にある布忍神社に挨拶に行ったのです。宮司さんにはお目にかかれず、取りあえず経歴書だけを置いてきたのですが、正月明けに電話がかかってきて設計入札に参加することになりました。

今村 落札したのですか。



写真10 布忍神社社殿（木造、1983年）

藤本 それで、まあ落札するはずはないだろうから、一人で行ってこいと言われて入札に参加したのですが、落札してしまっただけです（笑）。面倒見の良いその宮司さんには多くの大阪の神社を紹介してもらって、それからはずっと向こうで、大阪の方での仕事をさせて頂いて、数えたら十を超える神社の設計をさせて頂いています。先年竣工した茨木神社もそのご縁なんです。私はそういうこともあり、関係した数では京都よりむしろ大阪の方が多いですね。

新築工事の仕事の場合、最初にお話をいただいて基本計画を立案しても早くて



写真11 成田山新勝寺醫王殿（木造、2018年）

も3年や5年かかって、それからいよいよ実施設計をお願い出来ませんか、というような経過が多いです。

延原 今話に出ていました布忍神社の近くに浄土真宗のお寺があります。いまから25年以上前の話ですが、そこの調査に呼ばれて行って現状調査報告書を出しました。その時、調査費はって言われたのですが工事をされる時に呼んでくださいと言って、調査費は請求せずに10年以上ほったらかしにしていました。ある時、連絡が来て行ってみると、お金が集まったから工事を始めたいとのことでした。その間、ずーっとお金を集めておられたようなんです。あの時協会さんは調査費は要らん、集まったときに呼んでくれたらええと仰ったので今回お呼びしましたということでした。

藤本 社寺の造営は、話が出てから実際に建て始めるまで時間がかかります。皆さんから寄付を集めたり、いよいよやろうかという気運を高めるまでに時間がかかるのです。それまでに何も資料がないと話にならないので、何かと関わりが求められるのが実状です。

協会の中でのことで、規模が小さく赤字になる仕事ばかりが続くことがありますが、そんな仕事でも他の人の仕事にもつながっているから引け目を感じることはない、そう言われたこともありました。

仕事のつながりで言うと、協力業者さんは別として、設計事務所間のつながり

がほとんどないので困ることがありました。何か少し助けてもらおうとか、そういうやり取りがほとんど無かったですね。屋根とか意匠的なことは一般の事務所では難しいですから。

人とのつながりと言えば、協会の理事や非常勤研究員の京大の建築の先生方には何かとお世話になりました。堀内先生^{*4}に消防法の法規的なことで相談に乗って頂いたことや、山田先生^{*5}には壁のことならどんなことでも気さくに教えてもらえたことが印象深いです。



写真12 成田山大阪別院山門 (2024年)

今村 ありがとうございました。一応、ここで予定時間になりました。

最後に、本日ご出席頂きました理事長の銚井先生からご感想なりをお話頂けたらと思います。よろしくお願い致します。

銚井 ベテラン技術者お二人の話を興味深く拝聴させていただきました。建築研究協会の歴史の中で、一般建築を中心として扱った初期を経て、歴史的建造物の設計と改修に軸足を移した時期の様子

を、建物や関係した方々の名前を通してお聞きし、協会の成り立ちをより具体的に知ることができました。

設計監理業務の変遷を、協会が扱った寺院建築様式の違い、木材に限らず RC、鉄骨が採用された時代背景、構造強度、耐久性、予算などに基づく選択理由を中心に明快に説明いただき大変勉強になりました。特に、RC 造の本堂などが現在あまり採用されない理由がよく判りました。

今後の協会を担う若手人材の育成の重要性和難しさを感じ始めていたこともあり、それに対する何らかの答え、アドバイスが得られるのではと虫よく考えて臨んだ対談でしたが、曲線を多用する社寺建築の設計製図技術の取得の困難さ、現在の社会情勢における後継技術者の教育の難しさを伺う結果となりました。CAD～AI など新しい技術の導入が対応策の一つになるのではと考え、ご自身が用いてきた設計道具と製図方法の変化に関連させてその可能性を伺いましたが、一筋縄ではいかないようです。今回の対談では、逆に大きなチャレンジが与えられる機会になったと考え直しています。

長時間の楽しい対談をありがとうございました。

今村 皆さん、本日はありがとうございました。対談では、ちょうど50年前の協会の状況から始まり、お二人が携わって来られた社寺建築の設計を中心にお話

頂きました。

当協会の創立は1955年に遡りますが、京都大学の先生方を中心とする一般建築が主体の時期を第1期とすれば、1970年頃からの社寺の新築設計が主たる業務となっていた時期を第2期ということも出来るかと思います。もちろん、文化財建造物の修理や防災設計などの仕事も継続して行われていましたが、その後、2010年に中尾さん(中尾正治氏、元総括部長・理事、現技術顧問)が協会に移って来られたこともあって、文化財建築の修理・保存に関連する業務が拡大し、現在では伝統建築部門(統括部長：伊藤誠一郎氏)に新築設計、保存修理、構造診断、防災設計の4分野を置いて活動を進めています。

お二人のお話を伺って、改めて今の我々は偉大な先人たちの熱意と努力による実績の上にあることを認識致しました。最後に、この対談が70年に及ぶ協会の歴史を綴る一端となることを願っています。

注

- * 1 村田治郎：当協会理事長（1959～1985年）。京都大学名誉教授、明石工業高等専門学校名誉教授。建築史学を専門とし、文化財専門審議会専門委員など務めた。建築学会賞、日本学士院賞、勲二等瑞宝章、京都府文化特別功労賞等を受賞。1985年没。
- * 2 大森健二：当協会職員・常務理事（1965～2000年）。工学博士。滋賀県

教育委員会、京都府教育委員会を経て(財)建築研究協会に勤務。設計監理した主な作品には成田山新勝寺大塔(千葉県)、西芳寺本堂・三重塔(京都市)、智積院本堂(同)、平安神宮本殿(同)、養浩館(福井市)、湯島神社社殿(東京都)、伝通院本堂(同)等があり、代表的な著作には「社寺建築の技術—中世を主とした歴史・技法・意匠」等がある。2001年没。

- * 3 金彦 潔：当協会名誉顧問。京都大学名誉教授。建築構造学を専門とし、文化財建造物の保存修復・復元事業への技術指導を行う。日本建築学会大賞を受賞。

- * 4 堀内三郎：当協会理事長(1991～1998年)。京都大学名誉教授、関西大学でも教授を務めた。建築防災、特に建築防火の専門家。1998年没。

- * 5 山田幸一：京都大学で建築史学を専攻し、大阪市立大学、関西大学で教鞭をとる。京都の由緒ある左官屋に生まれたこともあり、「日本壁 技術と意匠」等の壁に関する多くの著作がある。1992年没。

編集部から：対談は発言者の意向を尊重して記載したため、それぞれの内容については十分な検証を行っていないので注意して頂きたい。